

ミロのヴィーナスは腕がないから芸術なのだと言ったことがある。

彼女には本来そこにあるはずのものが欠けている。だからこそ人は腕の部分に想像力を働かせてその人が考える最も美しい腕を補完するのだそうだ。そうして作られたいくつもの像が芸術になる。

「以上が本文の趣旨となります。よろしいですか」

現代文の先生の声が静まり返った教室に反響した。四十人近くいる生徒の大半は夢の世界へ旅立っていて、かろうじて意識のある数人がぎこちない笑みを浮かべている。マイペースな先生は特別気にすることなく黒板に向き直った。もう慣れっこなのだろう。廊下側の扉から漏れ出る隙間風の音を聞きながら、わたしは穴の空いたプリントの空欄を見つめた。

はて、ここに入る単語は何だっただろう。考え事をしていたのが祟<sup>たた</sup>って、重要な部分を聞き逃してしまった。

——あとでリツコに聞けばいいか。斜め前のスツと伸びた背筋を見て、わたしは思った。

リツコは真面目で大人しくて、クラスじゃあんまり目立たないような地味な子だ。傷みなんて知らないような濡<sup>ぬ</sup>れ羽<sup>は</sup>色のロングヘアを耳の下で結っていて、流行なんて無視したそっけない眼鏡をかけている。うるさい教室の中ではいつも何かしら本を読んでいて、わたしたちみたいな薄型のスマホなんか目もくれず、スリムなタイプのガラケーを一日に数回<sup>のぞ</sup>覗くくらいで、世間一般の女子高生とはちよつとズレている。

ズレていると言えば、彼女のこだわりもその一つだ。リツコはいつもマスクをしている。

リツコのマスクはちよつぱり見た目が変わっていて、眼鏡が曇<sup>くも</sup>らないために鼻筋にスポンジ素材のおまげが付いたものだ。別に風邪をひいているわけでも花粉症なわけでもなさそうなのに。リツコはマスクをしていない日がない。

ダサイ眼鏡のフレームは時々違うものになるし野暮<sup>よぼ</sup>つたい前髪は散髪されることだってあるのに、なぜかマスクだけは変わらないのだ。登校するときも、朝礼のときも、授業中も、休み時間中も、終礼のときも、下校のときだって。ずっとつけっ放しだからか彼女がご飯を食べているところなんて誰も見たことがないと言う。水分補給でさえ、夏になるまでいつしているのかも知らなかった（目撃したクラスメイト<sup>いわ</sup>曰く、ストローでサツと飲んでいたらしい）。わたしがリツコと同じクラスになっ

たのは今年が始めてだから、少なくとも九か月はそのスタイルを貫いていると断言できる。

ここまでくると、わたしは純粹にすごいなと思っていた。

あと、なんかカッコいいし。

わたしは一学期の終わり頃からリツコに目をつけていて、それから結構な頻度で観察させてもらっている。今日みたいに授業でわからなかったところを聞くことはあるけれど、同級生とするような気安い世間話は一切したことがなかった。

つまるところわたしの一方的な片思いってやつだ。

リツコは誰とつるむわけでもなく、先生以外とは必要以上に言葉を交わそうとしない孤高ここうの存在だ。話しかけるのは少々はばかられた。かろうじて陽キャグループにいるようなわたしとは違って、誰にでも分け隔へだてなく接するカーストトップの子たちでさえリツコだけは腫れ物扱いなのだからよっぽどなんだろう。

エスカレーター組の子に聞けば、リツコは中学の頃からすでにこんな感じだったらしく思わず頷うなずいてしまった。マスクをし始めたのは高校に上がってからだそうだが、それからの印象が強すぎてリツコがどんな顔立ちをしていたかは誰も覚えていないのだと言う。

まあでも、言いたいことはわかるなと思った。

もしリツコが雑誌に取り上げられるような絶世ぜっせの美少女だった

たとしても、毎日毎日マスクなんてしていたら記憶が薄れていくのは当然のことだ。それが特筆する点のない平凡な容姿であれば尚更なほさら。

「リツコ、ごめん。ここって何だったかな？」

大量のプリントを抱えた先生が出て行ってから、わたしはようやくリツコに話しかけることが出来た。シワのないピンと伸びた制服の生地がまぶしい。

振り向いたリツコは、手に持った自分のプリントを指差して短く答えた。

『跳躍』よ』

細い赤ボールペンで書かれた彼女の文字を網膜もうまくに焼き付ける。特殊から普遍への跳躍。抜き出されたフレーズを口に出せば、そいつはわたしの中にストンと落ちてきてくれた。

リツコはわたしが「ありがとね」と伝えるより先に黒板の方へと向き直った。レンズの奥の瞳は、規則正しく動く勤勉な時計をじっと眺めている。

期末テストが終わればお次は冬休みの出番だ。夏に比べれば期間は短いものの、行事は沢山あるし、何よりお年玉という収入が待っている。だからだらのんびりと過ごす時間は学校がない

からこそ楽しめるものだ。

校長先生のお話とやらを適当に聞き流しながら、わたしは前に立つしやんとした背中を眺めていた。ゴウンゴウンとうるさい暖房器具が体育館のあちこちでわめいている。大きな音がする割に効きが悪いのでムカつく。見た目重視のわたしは薄いストッキングにくるぶし上の短い白ソックスで震えている。

一方彼女は——リツコは、肌色の透けない分厚い黒タイツを身につけていて暖かそうだ。クラスどころか学年の大半はわたしみたいな量産型の格好をしているから、彼女の黒い脚は体育館の中でも浮き気味だった。

クラスメイトの塊に混じって教室に戻ると、すでにリツコは席に座って荷物をまとめていた。飾り気のないスクールバックは質の良さそうな革で出来た黒い箱のようにも見える。髪も目も服装まで真っ黒なのに、カバンを漁る手はほんぺんみたいに真っ白で思わず二度見してしまった。冬だから、ということもあるかもしれないけれど、日焼けをしないってのは羨ましいものだ。

ロッカーや机の横にかかった私物の量に悲鳴を上げる子たちとは違って、リツコの整理はすぐに終わった。わたしは元から私物が少ないのと、その少ないものたちを更にロッカーの奥底に封印してあるので問題はない。わいわいと賑やかな教室でリツコとわたしだけが口を閉ざして座っている。通知表を持った

担任が戻って来ても、それは変わらなかった。

今年最後の大掃除で運悪く雑巾掛けを引いてしまったわたしは赤くなった指先をカイロであたためながら駅までの道を歩いていた。うちの学校は立地が良く、徒歩十分以内で改札口までたどり着くことが出来るので、面倒臭がりなわたしにとっては嬉しい環境である。

いつもの足でコンビニに寄ってカフェオレを購入すると、店を出たあたりでちょうど彼女とすれ違った。リツコだ。「奇遇だね」と話しかければよかったのに、やっぱり勇気が出ない。中途半端に開いた口をマフラーと首の隙間にすっぽりと埋めて視線をさまよわせる。リツコは学校指定のダサイコートを律儀に羽織り、いつものマスクをしたままイヤホンもせずにもまっすぐ駅に向かっていった。一定のリズムで鳴るローファアの音にわたしの心臓の音が重なる。どうしよう。今日を逃したら、年が明けるまでしばらくは会えなくなってしまう。

「リツコ！」

気がつくことわたしは声を張り上げていた。手に持ったカフェオレがたぶんと揺れて親指にかかる。

「あつつ……！」

「大丈夫？」

くぐもった声がわたしの動きを止めた。冷え切った外の空気

を震わせたそれは、耳に馴染む少しかすれ気味の控えめな声。数メートル先からでもはつきりと聞こえたのは、わたしがリツコの観察を怠<sup>おた</sup>つていなかった証拠だろう。

リツコは長い睫毛<sup>まつげ</sup>を瞬<sup>またた</sup>かせてその場に立ち尽くしていた。膝丈のスカートがビル風に煽<sup>あお</sup>られてパタパタと揺れる。わたしはカフェオレが溢<sup>こぼ</sup>れないように気を付けながら足早に彼女の元へと近づいていった。

「リツコ、あのね」

口を開いてから、自分が何を言いたかったのか、さっぱりわからなくなってしまった。リツコを見かけて勢いで話しかけたはよかったものの、特に用があるわけでもない。わたしは焦ってしどろもどろになった。

「えっと……」

「どっち？」

「あ、二番線」

「私は一番線だから逆ね。じゃあ」

またね、とリツコの口から聞くよりも先にわたしは叫んだ。「よつ用事があるの！ だからわたし、今日は一番線に乗るんだった」

突然大声を出したわたしに少しだけ驚いたような目をして、リツコはぱちくりと瞬<sup>またた</sup>きをする。

「い……一緒に帰ってもいい、かな」

まるで告白でもしてしまったかのような気分だった。缶を持つ手はカタカタと震え、寒いわけでもないのに唇の色が紫になっていく錯覚がする。ドッドツとうるさい心臓に鎮まれ鎮まれと唱えていると、長く間を置いてからリツコが答えた。

「ええ」

イエスの「ええ」だった。夢見心地なわたしはマスクの下でどんなふうにもリツコの唇が動いているのか、そんなことばかりを考えていた。

平日の真昼間だからか電車内はいつにも増して空<sup>す</sup>いていた。流れで付いてきてしまったけれど、わたしはリツコがどこで降りるのか知らない。用事があると言ったからには終点まで座っているわけにもいかないし、困った。

隣に座ったリツコはあの箱みたいなスクールバックを抱きしめて微動だにしない。スマホを持ってないからといって本でも読めばいいのに。テストが終わったばかりで字を読む気にもならないわたしとは違って、彼女は本の虫だから、愛読書の一つや二つ持ち歩いておかしくないはずだ。

色々と思うことはあっても結局わたしは口を閉ざしたままだった。これじゃあ勇気を出して話しかけた意味がない。

「あのさ、リツコ」

リツコの睫毛がふるりと揺れる。ガタンゴトン、と鳴る電車の音がなければわたしのこの心臓の音は丸聞こえだったかもしれない。

「リツコは」

と言いかけて、やつぱりその先が言えなかった。リツコはどこで降りるの、とかリツコはどこに住んでいるの、とか多分聞きたいことは山ほどあったはずなのに。普通のノリでする世間話がどうしてかりツコの前だと出来なくなってしまう。

どうしてこんなに緊張してしまうんだろう。マスクのせいで彼女の口元が見えないからだろうか。反応が薄くてわかりづらいうから、怖じ気付いているのだろうか。

ぐしやりとスカートを握りしめる。わたし、馬鹿みたいだ。

「降りる？」

「え」

「用があるんでしよう」

「そ、うだけど」

バツと顔を上げると柱にひらがなで書かれた駅名が見えた。

新幹線や他の路線も集まる県内で一番大きな駅。

リツコはカバンを肩にかけて扉の真ん前に立っていた。他の客も殆どがこの駅で降りるらしい。わたしは慌てて荷物を抱き込み、急ぎ足でリツコの後ろに並んだ。

「リツコも、ここで降りるの？」

「ええ」

またイエスの「ええ」だった。わたしより少しだけ高い位置にある黒い頭がコクリと縦に振られる。

「どこ行くか聞いてもいい？」

車内アナウンスが流れる中、わたしは意を決して話しかけた。プシュウ、と音がして扉が開く。人の流れにあわせて遠ざかっていくその背中に、わたしは慌てて足を踏み出した。待って。待ってリツコ。切羽詰まったわたしの声は、勢いよくぶつかってきたサラリーマンのジャケットに吸い込まれてしまう。危うく缶の中身がかかってしまうところだった。不機嫌そうな男の背に平謝りしていると、すでにリツコは階段に足を掛けてしまっていた。

「リツコ！」

今度こそ届いたはずのわたしの声にもリツコは振り向かない。でも、ほんの一瞬だけマスクが動いたのが見えた。

「ないしょ」

構内で甲高い笛の音がピーッと響き渡る。駆け込み乗車はご遠慮ください。駅員の怒鳴り声がわたしの背後で聞こえた。

リツコはそのまま改札の方へと消えていった。その後ろ姿はあつという間に見えなくなつて、残されたわたしの後ろ姿はひとり、人のまばらなホームで突っ立っている。

手元のカフェオレはすっかり冷めきっていた。

\*

イブの女子会は大いに盛り上がった。昼前から集まって買い物にカラオケ、ゲーセンまでハシゴして夜は個室で少し高めのおしゃれな創作料理を食べた。つい先日誕生日だった二人をまとめてサプライズケーキで祝い、写真を撮ってはひたすら喋っていた気がする。とにかく楽しかった。みんなは口々にそう言っている。

「じゃあね」

「またねー」

「良いお年を！」

誰かが一人そう言うと、感染したようにみんなが言い始める。「良いお年をー」とわたしもにつこり笑いながら間延びした声でそう言った。集まったメンツの中で恋人持ちは一人だけで、バイト漬けの彼氏からやんわりと誘いを断られた彼女を励ますという名目で、わざわざイブの今日に召集がかかったのである。年末はそれぞれ忙しいだろうから次は年始、学校が始まるまではしばらく顔を合わせることはない。わたしはこのメンツが嫌いなわけじゃないけど、一週間以上会えなくて寂しいと感じるほど好きってわけでもない。所詮は、ひとりぼっちに

ならないための仮初めの集団だ。

「さむ……」

握りしめた定期入れごとポケットに突っ込む。例年よりいっそう冷え込んでいるとお天気お姉さんが言っていたが、本当にその通りだなと思う。明日はホワイトクリスマスになるかもしれない。

そうなったところで、わたしには関係ないのだけれど。吐き出した息がもくもくと上がっていくのをぼーっと眺める。闇色に溶け込んでいくはずの白は、イルミネーションの光を反射してキラキラと煌めいていた。

「あ」

駅へ向かう道の途中、またあの背中を見つけた。リッコだ！ どうしてこんな時間に、駅前にいるのだろう。思うことは沢山あったが考えるよりも先にわたしの足は動いていた。

「リッコ！」

恐れることなく彼女の名を呼ぶと、耳の下で綺麗に結ばれたツインテールがふわりと揺れた。わたしに気付いてくれたのだ。

「リッコ！ どうしたのこんな時間に」

「塾の講習があつて」

「塾……」

短く切りそろえられた小さな爪がスツと背後を指差した。振

り向くと、そこには巨大なビルがいくつも立ち並んでいるのがわかる。この中のどこかにリツコが通っている塾があるのだろう。高校編入組の中でもお気楽なわたしには想像もつかない勉強量なのかもしれない。うちは成績的には中の上程度の私立高校だが、中学からのエスカレーター組が八割を占めているのもあってか中だるみしてしまう生徒が多いのだという。リツコのように真面目に塾に通っているのはほんの一握り。わたしは住む世界が違うのだ。

呆けたままのわたしにリツコは肩をすくめて見せた。見たことのない反応に一瞬どきりとしたが、呼び止めたわたしを咎めるような態度ではなかったのでほっと胸をなでおろす。

「あなたは？」

あなた、がわたしのことを指しているのだと気付くのにしばらく時間がかった。ぼんやりしていたわたしはリツコの黒曜石みたいな目が三回瞬きをするまで、彼女に話しかけられた実感が湧かなかったのである。

「く……クリスマス会、してて……その帰り」

「ふうん」

今ほど彼女のマスクを剥ぎたいと思ったことはなかった。伏し目になった切れ長の瞳はもうわたしの方を向いてはいない。もう話す気はないのだろう。

「ま、待って」

「何」

「か……カラオケ行かない？」

へら、と笑ってみた。何を言っているんだろうわたしは。すぐにここを去るであろうリツコをどうしても引き止めたくて、苦肉の策がビルの隣にあった格安カラオケチェーン店だなんて。そもそもリツコはカラオケが何たるかを知っているのだろうか？ もし知っていたとして、こんな時間から遊ぶなんて頭がおかしいと思われるのではないか？

下瞼を引きつらせながら「はは」と笑ってごまかそうとしてみると、リツコはたつぷりと間を開けてから静かに答えた。

「ええ」

やっぱりそれはイエスの「ええ」だった。

通された部屋は最上階の角部屋だった。フロントからもドリンクバーからも遠い不便なところだったが、まあ待たされなかっただけマシだろう。勢いだけでここまで来たのに満室ですとも言われたら正気を保っていられる自信がなかったのだ、そういう意味では助かったのかもしれない。

入室するやいなや、リツコは部屋を中心でまっすぐ棒立ちになつて固まった。微妙な時間帯というのもあって、わたしたちにあてがわれたのはタバコのおいが残る四人がけソファの部屋だった。別に珍しいものじゃない。

「リツコ？」

もしかして本当に初めてだったのだろうか。不安になって声をかければ、リツコはマスクをわずかに震わせて答えた。

「久しぶりに来たわ。静かね」

静か、というのはこの部屋の場所によるものだと思っただが、わたしは何も言わなかった。「久しぶり」の方が気になったからだ。

「前はいつ来たの」

「さあ」

「覚えてないくらい昔？」

こくん、と頷かれる。大画面のテレビに映し出された売り出し中のアイドルを見て、リツコは何を思っているのだろう。

マイクと端末をテーブルに並べると、リツコは音も立てずにソファの端に腰を落ち着けた。それにならってわたしも腰を下ろす。

「一時間しかないから早く歌おうよ」

「……」

「え、リツコは何歌う？」

「……」

「……好きなアイドルとかアニメとか、ないの？」

窺うように問いかけると、リツコはピクリと眉を動かした。ブルーライトを反射した眼鏡の奥で、丸い黒目がゆっくりとこちらを向く。

「特に」

「そ……そっか」

「歌うのは得意じゃない」

「あはは……」

「でも、楽しかったって記憶はあるわ」

何でかな。そんな独り言じみたリツコの呟きは、わたしの鼓膜を揺さぶってそのまま脳みそに直接殴りかかってきた。

リツコが自分の話をしている。リツコが、わたしに話をしてくれている！

わたし、リツコと話してるんだ！

「わかる、わたし中学んときからカラオケ行くのめっちゃ好きでさ。いつかリツコと来たいなって勝手に思ってたの。だから今日一緒に来れてすっごく嬉しい！」

しまった、と思ったのはリツコの目が見開かれていたのがわかった瞬間だった。

「ご、ごめん調子乗って。わたし、なんかさつきから一人で喋りすぎだよね。ここ引っ張って来たのも強引だったし……。あ、リツコ嫌だったら出てっていいからね。お金わたし払っとくからさ」

「嫌だったらとっくに帰ってる」

「え……」

ピピッ、と音がした。画面には曲のタイトルがデカデカと表



示されていて思わず身を乗り出してしまう。

「あー、あー」

マイクの音量を確かめるようにリツコが声を出した。エコーのかかったそれは静かだった部屋の中に何度も跳ね返り、わたしの全身に染み込んでいく。

リツコは結局最後までマスクを外さなかった。でも、歌っている姿は何となく楽しそうだなと思った。わたしはそれだけで十分嬉しかった。

わたしたちはきつちりと割り勘したルーム料金を払ってから店を出て行った。数字だけだと大した長さではなかったけれど、誰かといったカラオケの中で一番濃密な時間が過ごせたとと思う。その日はそれっきり会話らしい会話はせず、迎えが来るのだというリツコと駅のロータリーで解散になった。

別れ際、わたしが全身全霊をかけて「良いお年を」と言うと、リツコは一拍遅れで「ええ」と返してくれた。そのあとマスクが震えて、野暮つたい眼鏡の下半分がぶわりと曇ったのが見えたので、きつと彼女は「良いお年を」と言ってくれたのだと思う。わたしはひどく満ち足りた気持ちで帰路についた。

\*

キンと冷えた空気に<sup>そうじ</sup>荘厳な雰囲気。今年中学受験を控えている妹のためにと家から一時間以上かかるこの神社に初詣に来ていた。わたしは早々に戦線を離脱しており、端っこでチビチビと甘酒を飲んでいる。一通り写真も撮って満足したし、未だにうるさいラインの通知を見るのも嫌だったので、片耳にイヤホンをして適当にプレイリストを流していた。本当は早く帰ってこたつで寝転がりたい。おみくじを引く気も起きず、まばらになつてきた人の波をぼうつと眺めていたわたしを驚かせたのは、またまたあの背中だった。

「ユミ」

声をかける前に振り向かれる。驚いたことに、キヤラメル色のダツフルコート<sup>まど</sup>を身に纏ったリツコはなぜか裸眼だった。そばにはやんちゃ盛りの男の子がいて、足を止めたリツコを気にすることなくさっさと階段を上がって行ってしまふ。置いてけぼりになったリツコはゆつくりと二度<sup>まばた</sup>瞬きをして、不思議そうな目でわたしを見てきた。

「あ、えっなんで……」

「初詣。兄さんが今年受験だから、それで」

わたしが聞きたかったのは、それじゃない。今まで一度も名

前で呼ばれたことなどなかったのに、どうして急に呼び捨てになつたのだろう。

「というか眼鏡はどうしたの。あなたのトレードマークみたいなものなのに。思いつくことは山ほどあったけれど、わたしに問いかける勇氣はなかった。引っこ抜いたイヤホンをスマホにクルクル巻きながら足元を見つめていると、ジャリ、と音がする。

「ダメかしら」

「えっ」

「あなたのこと、つい呼び捨てにしちゃった」

「整えられた眉がハの字に曲げられる。よく見るとうっすら化粧をしているようでドキツとした。今のわたしは、身内の集まりだしいいか、いつものルーチンを無視して適当にまとめた髪とリップだけ塗りたくったすっぴん顔だ。直視されるのが恥ずかしくて思いつき横を向いた。

「ダメじゃないけど……」

「でもさつきから目を合わせてくれないわ」

「リップコ、違うの。わたし今日すっぴんで」

「かわいいのに」

とリップコが呟く。わたしは自分の耳を疑った。

「え、つと……リップコ？」

困惑するわたしを他所に、リップコはいつもの調子を保って

る。視線はさつきからずつとわたしの手元に釘付けらしく、どうやら甘酒が気になるようだった。

「飲む？」

「おいしい？」

「ちよっとクセがあるけど、甘くておいしいよ」

「何の足しにもならないコメントしか出来なかったが、リップコは心得たとばかりに紙コップを受け取ってくれた。

「そこでようやくわたしは気付く。リップコが、わたしの前で飲み物を飲むとしていたのではないか。

「ついに、マスクの下が見えてしまうのだろうか。

「たった数秒の間に気が高ぶって、わたしの心臓はバクバクとせわしく脈動していた。まだ半分ほど残っていたそれをどうするのか、今の彼女を間近で見ているのはわたしししくない。

「リップコの真っ白な指先がマスクのワイヤーにかかる。その瞬間がわたしにはスローモーションのように感じられた。

「おいしい」

「血色のいい唇が柔らかな四文字を紡ぎ出す。スツと通った鼻先は高すぎず低すぎず。想像よりも丸みを帯びた顎のラインには小さなホクロが二つあって、白い肌とのコントラストをはっきりさせている。全体的にバランスも整っていて小綺麗な顔立ちだった。

「でも、それだけだった。わたしは、わたしの中で何かが

崩れ去っていく音を聞いたのだ。

「ありがとう、ユミ」

リツコはそう言って淡く微笑んだ。薄っすらとグロスの塗られた唇はわたしの数倍かわいかったけれど、それ以上の感想は湧いてこなかった。

眼鏡もマスクもない、ありふれた格好をしたリツコ。わたしを受け入れて、友だちのように名前を呼んで来るリツコ。

その全てに裏切られたと感じてしまった自分に絶望した。

「……口にあってよかった」

ぎこちなく笑いながらもそう返せば、リツコは赤い唇を震わせて「ええ」と言った。

彼女の口元を遮るフィルターはもう存在していない。

\*

三学期が始まった。抜け殻のようになったわたしの斜め前の席には、以前と変わらぬリツコの姿がある。ストレートの黒髪に野暮ったい眼鏡。クツション付きのマスクも相変わらずだ。

わたしの視線に気付いたのか、リツコはゆっくりと首を動かしてわたしの方を向く。物問いたげな表情だった。

けれど、わたしは応えなかった。応えられなかったのだ。わたしはリツコに自分勝手な理想を押し付けておきながら、あのマスクの下を知ってしまった途端に手のひらを返した最悪な女なのだ。

そんなわたしに彼女の名を呼ぶ資格などない。だから逃げるようにして顔を背けるしかなかったのだ。

わたしたちは友だちどころか最早ただのクラスメイトに戻る。ことさえ出来なくなってしまう。わたしの求めるリツコはどこか遠くへ跳んでいって、わたしの前からいなくなってしまうのだらう。